

世間解 第四五一号

令和七(二〇二五)年九月

発行 西法寺

念佛もうさるべし

一ありがとうございます

日々日常的に出てくる言葉がありますが、改めて“ありがとうございます”という言葉を味わわせていただきたいと思います。“ありがとうございます”を漢字にすると“有難う”有ることが難いということであります。バサッと申しあげれば“普通は無いねんで”ということでありましょう。

九月であります。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまだぶ、なんまだぶ…」とお念佛ご相続のことと存じます。

来月は西法寺の報恩講さまです。
十月三日(金曜日)と四日(土曜日)の二日間、どちらも午後二時からお勤めをさせていただきます。初日の三日は午後六時からもお勤めさせていただきます。
初日は西法寺住職がお取り次ぎ(ご法話)をさせていただきますが、四日は梯信暁先生がお越しくださつてご法話をくださいます。

また初日三日の二時からのお勤めは、若手僧侶の皆さまが中心となつて「初夜礼讚」という大変美しい旋律のお勤めをくださいます。是非ともお勤めにお遇いいただきたいと思います。

報恩講さまとは親鸞聖人のご命日のお勤めであります。親鸞さまの「命日のお勤めは、ただご法事といわずに報恩講と申しあげるのであります。親鸞さまは弘長一年十一月二十八日のお昼頃にご往生なさいました。以来、毎年ご命日のご法要がお勤まりくださっています。親鸞さま当時の暦(旧暦・太陰暦)を今の暦(新暦・太陽暦)に合わせると、十一月二十八日は明くる年の一月十六日になるというので、ご本山(西本願寺さま)では、一月十六日を親鸞聖人のご命日と定めています。弘長一年十一月二十八日を今之西暦に合わせますと二六年の一日十六日になるのだそ�であります。今年は二〇二五年でありますから、やがて七六三回目のご命日が来てくださるということになります。

報恩講さま、「おんむく恩に報いるお勤め」ということであります。具体的には親鸞聖人のご恩に報いるお勤めであります。

“ありがとうございます”という言葉があります。感謝をあらわす言葉として、

ろに“ありがとうございます”という言葉が紡ぎ出されるのでしょう。
そうして紡ぎ出された“ありがとうございます”にはただ感謝を伝えるだけではなく“ご恩に感じる”“ご恩を感じる”という思いがあるのでしよう。
「ご」開山さん(親鸞聖人)さま、ありがとうございました。あなたのおかげで私はあなたと同じお念佛をいただいて、同じ信心をいただいて、同じお淨土で今まで出遇わせていただきます。」とそう親鸞聖人にお礼申しあげるのが報恩講をお勤めさせていただく意味なんじやないかな」とお教えくださったのは梯實圓和尚でした。
その梯和尚のお言葉を承けて山本撮鶴和尚は「私に、親鸞聖人と同じような学問をし、経験をしなさい」といわれてもそれは不可能、無理だといわねばなりません。しかし親鸞聖人が仰がれた同じ阿弥陀さまを仰がせていただくことはできません。しかし親鸞聖人が仰がれた同じ阿弥陀さまを仰がせていただくことはできるんでしようね」とお教えくださったのであります。
「ご恩に報いるいうけど、私には報いる、返すことが出来るようなものは何もないのよ。私はこの頃、いただいたものをそのまま慶ばせていただくのが本当の報恩でないかなあと味わっています。」とお教えくださったのは利井明弘先生でした。“ありがとうございます”とは本来有るはずの無かつたことが有つてくださること。なんといつてもその一番は私が今「なんまだぶ、なんまだぶ…」とお念佛申す身にならせていただいておることであります。

「阿弥陀さま、ご往生くださつた方々は間違ひなしに私を支えてくださつてんねんなあ…。そんな事を味わわせていただけるようになつたのも親鸞さまのおかげやなあ…。」色々な事が身の上にやつてくる日暮らしであります。一人ひとりがその日暮らしの中で、阿弥陀さまに、親鸞さまにお念佛さまに聞き続けてゆく。どうぞ報恩講さまにお参りください。